

## 主日礼拝説教「犠牲を受け継ぐ」 予稿

日本基督教団石神井教会 2026年9月20日

### 【旧約聖書日課】出エジプト記 12章21～27節

<sup>21</sup>モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼らに命じた。

「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。<sup>22</sup>そして、一束のヒソブを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。<sup>23</sup>主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである。

<sup>24</sup>あなたたちはこのことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。<sup>25</sup>また、主が約束されたとおりあなたたちに与えられる土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。<sup>26</sup>また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか』と尋ねるときは、<sup>27</sup>こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と。」

民はひれ伏して礼拝した。

### 【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 9章23～28節

<sup>23</sup>このように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清められねばなりません。<sup>24</sup>なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。<sup>25</sup>また、キリストがそうなされたのは、大祭司が年ごとに自分のものでない血を携えて聖所に入るように、度々御自身をお献げになるためではありません。<sup>26</sup>もしそうだとすれば、天地創造の時から度々苦しまねばならなかったはずです。ところが実際は、世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。<sup>27</sup>また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定められているように、<sup>28</sup>キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

### 【福音書日課】マルコによる福音書 14章10～25節

<sup>10</sup>十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。<sup>11</sup>彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

<sup>12</sup>除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行つて用意いたしましょうか」と言った。<sup>13</sup>そこで、イエスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に会う。その人について行きなさい。<sup>14</sup>その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』<sup>15</sup>すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」<sup>16</sup>弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。<sup>17</sup>夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこへ行かれた。<sup>18</sup>一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは

言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。」<sup>19</sup>弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。<sup>20</sup>イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。<sup>21</sup>人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」

<sup>22</sup>一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」<sup>23</sup>また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。<sup>24</sup>そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。<sup>25</sup>はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」

## 食事の儀式【こども説教のために】

主イエスが弟子たちと過ごされた日々の終わり、最後の晩になさったのは、特別な食事でした。その時代よりも千年以上前から受け継がれていたという「過越の食事」を、弟子たちと共になさったのです。

「過越の食事」は、ファラオの支配するエジプトに「初子の災い」がもたらされたとき、主なる神がモーセを通してイスラエルの人々にお与えくださった儀式です。「過越の食事」の儀式を整え、「**過越の犠牲**」として屠られた羊の血を入り口に塗った家の者は皆、「初子の災い」を過ぎ越していただけました。イスラエルの人々は皆、この儀式を行ったので、「初子の災い」を受けることなくエジプトを離れることができたのです。

この儀式は、大人から子どもたちへと代々受け継がれて行きました。主イエスの時代、ユダヤ人は皆、これを受け継いでいました。毎年、過越祭になると「過越の食事」を共にして、主なる神が災いから逃れさせてくださるお方であること、自分たちの家全体を新しい命へと導き出してくださるお方であることを、思い起こしたのです。

主イエスが弟子たちと過ごした最後の晩は、「過越の食事」をする日でした。準備された家の二階の広間で「過越の食事」をなさいました。そして、その中で、パンを取って、こう言われました、「**取りなさい。これはわたしの体である**」。また杯を回して言われました、「**これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である**」。

このときの食事の儀式を、弟子たちは「主の晩餐」と呼んで、教会に受け継がせました。教会で「聖餐」と呼ばれる儀式です。主イエスご自身が「過越の羊」となってくださったことを記念し、主イエスが十字架で流された血によってわたしたちを「神の民」、「神の子」としてくださったという契約を思い起こす儀式として、受け継がれているのです。

## あなたと子孫のために

「敬老の日」に合わせて主日礼拝の中で「高齢者の祝福」を祈るということが、多くの教会で行われてきました。その際に子どもたちから高齢者の皆さんにカードなどを贈ろうという発想は、教会にとっても良いことと考えられてきました。子どもたちの活動である「教会学校（こどもの教会）」は、かつて子どもの人数が多かった時代には、その中で完結してしまうところがあり、大人たちからは見えにくかったのです。「何をしているか分からない」と思われている「教会学校」の子どもたちが、高齢者限定とはいえ接点を持って関わる機会だとすれば、贈り物をするというのは、お互いの姿が見えるようになる良い機会であるのは間違いないからです。

ところが、世の高齢化と少子化の進行が教会にも及ぶようになると、事情は少し違ってきました。贈り物をする対象の高齢者は増えるばかりなのに、贈り物を準備する子どもは減るばかり、となれば、子どもたちの負担は増すばかりです。実際には、子どもたちと共に歩むためにリーダーとして奉仕してくださっている方たちの負担が増してきたのです。だからと言うわけではないでしょうが、子どもを迎えることをやめてしまった教会もあるようです。子どもがいなければ、子どもと大人を繋ぐ労力も必要ありません。

けれども、わたしたちは、それでよいとは思えません。主イエスが、子どもたちをお招きになられたからです。大人たちの真ん中に子どもを立たせて、「**神の国はこのような者たちのものである**」（マルコ 10:14）とおっしゃられたのです。「**子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない**」（同 15 節）とおっしゃられて、子どもを模範とすべきことをお教えになられたのです。

だからこそ、わたしたちは、子どもたちを真ん中に迎えることを大切にしてきました。そして何よりも、信仰者として長い年月を重ねて来られた大先輩たちのただ中に子どもたちを迎えることを、大切にしたいのです。長い人生の中で、「**子供のように神の国を受け入れる**」ことをご自身の目標とし、そうなることを願って歩んで来られた高齢者の皆さんこそ、子どもたちを迎えて互いに祝福し合うにふさわしい存在であるに違いないからです。

主イエスがお教えになられたのは、自分一人の心の平安や精神的な安寧を獲得する道ではありません。**多くの人が神の国を受け入れ、互いに祝福し合うことができるようになるための道**です。モーセを通して定められた「**主の過越**」が家族ごとに守られ、家の者が皆救われるようになるための**儀式**であったように、主イエスは、ご自身で教えられ、定められたことを通して、わたしたちの家族が守られ、それぞれの家の者も、神の家の者も、皆が互いの命を祝福し合う命の交わりに至るようになることを願われたのです。

## 「どういう意味があるのですか」

主イエスが弟子たちと最後になされた晩餐の営みから始まった「主の晩餐」つまり「聖餐」をはじめとして、教会の営みの中心である礼拝は、そのほとんどが儀式として整えられてきたものです。「聖餐」のように明確に主イエスに遡ることばかりではありませんが、ほとんどのことは、主イエスご自身がユダヤ人として先達から受け継いでいらした安息日礼拝や、使徒たちが主イエスの教えに従って初期の時代から整えてきた「主の日の集会」に遡ることです。かつて、長い歴史の中で余計な要素が加えられてしまっていると批判されたことがありました。他方で、大切な要素を不用意に捨ててしまっていたことも、現代では反省されているのです。結果として、今日では、互いに違いが強調されていた教派間で、主イエスや先達から受け継ぐべきものが何であったのか、かなり共通の理解が得られるようになりました。

もちろん、わたしたちは、礼拝が単なる儀式でよいとは考えていません。形式さえ整えればよい、とはだれも思っていないのです。それが儀式であるからこそ、形式を伴うものであるからこそ、なぜそうするのか、何のためにそれをするのか、説明できることが必要なのです。

モーセがイスラエルの長老たちに告げた「**過越**」は、『聖書』の中でも最も古い時代に定められた「**儀式**」であると言えます。主なる神は、エジプトで何百年も過ごし、主のことも知らず、自分たちの罪の自覚もない人々を、どういうわけか選ばれて、新しい地に導き出すことにされました。信仰心も悔い改めもない人々を導き出されるために、主は、まずこの儀式を定められたのです。儀式として形式どおりに執り行うように命じられたのです。その儀式に形式的に参加することが、彼らの救い、彼らが新しい人生に踏み出するための第一歩として用意されたのです。

その人々に、モーセは、「**このことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない**」と命じると共に、一つのことを加えました。子どもたちに、「**この儀式にはどういう意味があるのですか**」と尋ねさせるのです。そのとき、大人たちは、その意味を答えなければなりません。その意味を知っていなければなりません。いいえ、その意味を知っているからこそ、彼らは、この儀式を守り続けたのです。代々、現在に至るまで、彼らは守り続けているのです。

主イエスは、ご自分の死の意味を「**過越の犠牲**」という**儀式**の中に組み込まれました。わたしたちは、主イエスと使徒たちから受け継いだものを与えられています。神について、信仰について、罪について、救いについて、主イエスの十字架死について、悔い改めについて、『聖書』の御言葉として受け継ぎ、儀式として受け継ぎ、後に続く者に受け渡そうとしているのです。